山形県

街道１

山形らしい道路遺産に朝日軍道（朝日町、慶長 4（1599）頃）A がある。上杉景勝（秀吉の五大老）は、慶長 3 に豊臣秀吉により会津 120 万石に加増移封されたが、東北諸大名と家康の監視と牽制という重い使命が課せられていた。飛び地所領の庄内三郡と会津の間には家康寄りの最上義光がいたため、家老・直江兼続に命じて緊急連絡用に造られたのが 1800ｍ級の山岳尾根沿いに走る全長約 60 キロの抜け道であった。戦国末期の軍道は、武田信玄の「棒道」がある程度なので、歴史的に貴重な存在と言える。ただ、残存状態は良くなく、西朝日岳登山道（写真の黄色の枠内の左側の弧状の道が現在の登山道）の脇に、つづら折の道路痕跡として視認可能な程度に残るのみである。

街道２

黒沢峠の敷石道（小国町、天保 10（1839））A は、越後米沢街道 13 峠の一つであり、その中でも、かつての石敷が完全に復元された唯一の峠道である。埋もれたまま地中に残っていた石は約 3600 枚、昭和 55 に「黒沢峠敷石道保存会」が発足、延長約 1.8 キロにわたって続く石敷を掘り起こし、往時の姿を再現させた。ほとんどの区間は、庭の「飛び石」のように土道の中央に一列に石の並ぶ構造で、石畳と区別するため敷石道と標記する。敷石は 13 峠すべてに設けられていたと推測されるが、現在掘り出されているのは、萱野峠（800m、石畳も混在）と朴ノ木峠（数 10m）だけである。イザベラ・バードが明治 11 に新潟から山形に抜ける際に通ったことでも知られ、第十七信には、「沼からここまでの距離はたった一里半であるが、けわしい朴ノ木峠を越えなければならない。何百というごつごつした石の階段を上がったり降りたりする」という記述がある。

街道３

山形を代表する一里塚は、羽州街道の鳥越一里塚（新庄市、江戸期、市史跡）A である。塚は一基残るのみで、盛土は低いが、そこに天に向かって樹高 25m のブナの巨木が残っている。塚木には松、榎などが植えられたとされるが、松は 1 基で残るのみで（松枯病で伐採寸前）、一番多く残るのは榎の 13 基で、以下、欅 10 基、杉 5 基、サイカチ 3 基、コナラ 1 基、ブナ 1 基、シイ 1 基、クヌギ 1 基、山桜 1 基となっている。榎は西日本で多い。鳥越一里塚の解説板には「ブナの塚木は珍しい」と書いてあるが、国内では唯一の残存例である。

街道４

洲島の舟繋石（川西町、江戸期）B は、最上川（松川）と鬼面川、和田川、吉野川が合流する地点の渡し場に置かれていたもので、下の方に目繰り状の穴が２つ開いている。イザベラ・バードがここから舟で川を渡ったことでも知られている。

舟運１

山形で最も素晴らしい土木遺産は、最上川の佐野原の舟通し（白鷹町、元禄 7（1694））Ⓐ である。近世最大の舟通しで、川の中央を長さ約 500mにわたり、幅 10-11m、深さ 1.5mの断面で開削し、川舟の航行を可能にした。京都の豪商でもあった米沢藩御用商人・西村久左衛門が私財 17000 両を投じて造ったもので、京都の事情に詳しかったことから保津川開削（慶長 11（1606））を参考にしたと言われる。元禄元（1688）に保津川から技術者集団を呼び寄せて現場の準見と測量を開始したが、開削にあたっては鉄槌（重約 340kg、楔形、鋳物製）を約 6mの高さから落下させて岩を砕いたと言われる（鉄槌を吊り下げるロープには「青苧（あおそ）」が利用された）。渇水時にしか雄姿を見られないのは残念である。

農業１

金山大堰（金山町、天正 8（1580）頃）B は全長 4.5 キロの小規模な用水で、戦国末期の金山城主・丹与惣左衛門の時代以降、城下集落の農業用として、次いで近世の宿場集落の農業及び生活用水として開発されたものである。ここで敢えて取り上げたのは、昭和 52-58 の農村総合整備モデル事業で約 2.5 キロの市街地内区間が修景的に改修され、街並みを一変させた先見性を評価したからである。

鉱業１

延沢銀山遺跡（尾花沢市、慶長年間、正保 4（1647）、国史跡）A は、佐渡や石見・生野に匹敵する産銀があったと言われる銀山だが、元禄 2（1689）の大崩落で閉山されたため、当時の姿をよく留めている。慶長年間に延沢氏の領有下にあった際に開山し、元和 8（1622）山形城主・鳥居忠政の支配下になった頃から寛永 11（1634）に幕府の直山となった頃までが絶頂期とされる。正保 4（1647）に西山を掘り尽くして東山に移るが、現在史跡指定されているのは、その時代の採掘坑である。「焼取り採鉱」の跡が黒々と残っている。

防災１

松川左岸の直江石堤（米沢市、慶長 6（1601）頃、市史跡）Ⓐは、日本を代表する石堤防である。土堤防は全国に数多く残っているが、河川の石堤防は事例が少なく、石張りではなく芯まで石で造られた堤防は稀で、それが 1.2 キロ（当初長 3 キロ）にわたって残っているのは奇跡的ですらある。

慶長 5（1600）の会津征伐で家康と敵対し、その最中に起こった関ヶ原の戦いで西軍側にくみした結果、冒頭の「朝日軍道」で「会津 120 万石に加増移封」された上杉景勝は、米沢 30 万石に減移封されてしまう。そのため、家老・直江兼続は新たな土地の開墾を進めようと治水事業に力を入れ、米沢城下を洪水から守るための大規模な石堤防を築いた。石堤の一部を切り崩したところ、堤の中心部から直径１ｍを越す巨石が次々と出たと報告されている。

防災２

日向〔にっこう〕川（酒田市、文久 2（1862））B は、日向川の水害防止を目的に高さ 30ｍの庄内砂丘を開削した延長 2.5 キロ、幅 200ｍの新川である（放水路ではなく付替え）。

防災３

庄内砂丘の松林（酒田市、1700 年代中頃）Ⓐは、現在長 33 キロ、幅 1.5～3 キロと、国内最大の海岸砂防林の一つである。砂地に強い草を植えて砂丘の表面を落ち着かせ、次にネムノキやグミなど、砂地に強く地力を肥やす潅木を植え、その後ろに「主役」たるクロマツを植える、という植林手法は 1700 年代の中頃に定着する。近代の植林が大半を占める。

防災４

竹森の石番小屋（高畠町、嘉永 5（1852）、市民俗資料）B は、大きな岩を半円形にくり抜いた一枚壁の上に巨大な傘石を載せたもので、「火の用心」の見廻りの詰所に使われた。全国唯一の遺構である。

衛生１

笹堰（山形市、寛永元（1624）頃）A は、初代山形藩主・鳥居忠政が、洪水対策として馬見ヶ崎川の流路変更をする工事を行った際、併せて城濠への水の供給と、生活・農業用水の確保のため設けた５つの堰（山形五堰）の一つで、計６堰の集合体で総延長は 47.5 キロに達する。